

登校指導というよりは、子どもたちと一緒に歩いているといった方が近い。一番遅い班の後ろについていくような格好である▼今日もある女の子に「今日のたのしみはなんですか？」と質問する。これまで何回も質問してきたが、毎回帰ってくる答えは、「ない」である。ところが今日は、「ある」と言ってくれた。はじめての答えである。「なんですか？」と聞いてみると「クラブ」だという。彼女は工作クラブに入っている▼クラブは、4年生以上の子どもたちが、自らの興味・関心に基づいて選択している。今年度開設されているクラブは、5つ。「ボールクラブ」「工作」「イラスト」「音楽」「ボードゲーム・カードゲーム・けん玉・昔の遊び」。それぞれ教員が分かれて指導にあたる▼このクラブは年間3回しかない。今日がその最終回にあたる。このクラブが終わると、もう彼女の楽しみはなくなってしまうのだろうか。だとすれば、非常に残念である▼彼女が学校の中に「たのしみ」が見つけられるとよいが、どんな要素がそろうと「たのしみ」になるのだろう。明日からは質問の方法を替えて探っていくと思う▼彼女は、たのしみがないと言いながらも毎日学校に来てくれる。それでいいじゃないか！いやいや全くよくない。学校は子どもをたのしませる場ではないが、「たのしく学ぶ」場でなければならぬ。彼女の知的好奇心に火を付けたい。